

## 超高齢の透析導入を考える

長崎腎病院

○森山 麗、内山浩子、青柳真生、下田美智子、山中真樹子、丸山祐子  
宮崎健一、李 嘉明、船越哲、原田孝司

### 【背景】

透析導入しても機能的予後・生命予後は短い可能性があるにも関わらず、透析導入される超高齢患者が増えている。当院においても85歳以上の血液透析導入は27.3%を占めている。

### 【対象・方法】

2008年から5年間に、当院で透析導入された超高齢者(85歳以上)22名の状況について分析し、今後の看護に役立てる。

### 【結果】

導入件数のうち外来での導入は9%入院が91%であった。導入時は独歩32%、護送55%で、ほとんどは本人の意思確認は可能であった。約50%は外来通院が可能であった。導入から死亡までの期間の中央値は364日(1日～1428日)、死因の53.3%は感染症であった。透析中には何らかの昇圧剤を使用しており、シャントトラブルは45.5%にみられた。

### 【考察】

超高齢者の透析導入ではADL低下・全身状態悪化の速度は早いことが予測されるが、環境により外来通院、施設での生活等も可能となる。加齢による全身の機能低下を免れることはできず、超高齢者の透析治療は広い意味での終末期医療と考えられる。それぞれの患者の残された機能を十分に理解し、倫理的側面も考慮しながら、できるだけ本人・家族の意思を尊重した悔いの残らない最期を迎えられるよう援助する必要がある。